

「話し合う力」を育てる教師の教室発話

井上 雅彦（本学教職研究科教授 国語教育学）

国語科において、話し合う力を育てることは言うまでもありません。しかし、それ以上に教師の日常の発問形態が話し合い能力に大きな影響を与えることを心得ておかなければなりません。

（1）教師の教室発話の学習者への影響

渡辺は教室談話で使われる言語表現が、思考の型の違いになってあらわれることを指摘していますⁱ。

渡辺は日本とアメリカの歴史授業において、日本の教師は、過去の出来事を時系列に教え、「順番・過程・状況」に重点を置いて歴史的事実を教えていることを見いだしました。一方、アメリカの教師は、最初に時系列で学習した出来事を因果関係に置き換える訓練に授業の大半を費やし、歴史的事件の登場人物の「目標・意志・行動」に力点が置いた授業を行っていました。

そこで日本とアメリカの子どもに四コマ漫画について作文を書かせたところ、日本の子どもの93%が「そして、それから、こうなった」というような時系列表現を多用しました。一方、アメリカの子どもも多くは時系列表現をするものの、34%が因果律を使った表現をして、最初に出来事の総まとめや評価・感想を述べ、それらのまとめや感想をもつに至った理由を述べていました。このように、教師が使う言語表現が学習者の思考に影響を与えることがわかったのです。

日本の場合、小学校から高等学校まで学習者は12000時間の授業を受けます。そのなかで教師の教室発話が学習者の思考に大きな影響を与えているわけです。

（2）IRE連鎖からの転換

メーハンは教室におけるコミュニケーションの異質さを指摘しました。通常のコミュニケーションではものを知らない人がものを知っている人に尋ねるのに対し

て、教室ではものを知っている教師がものを知らない学習者に尋ねます。このような教室におけるコミュニケーションをメーハンはIRE連鎖と呼びました。それは次の例のように、教師の会話の切り出し（Initiation）→子どもの応答（Reply）→教師の評価（Evaluation）という形で相互作用が行われます。

教師：「AとBどちらが小さいですか？」

児童：「Aです。それは……だからです」

先生：「正解です。よくできました」

エドワーズとマーサーはIRE連鎖を支えるのは、以下①～④のグラウンド・ルールが共有されているからだを指摘しますⁱⁱ。

①質問を行うのは教師である

②教師の質問には正しい答えが存在している

③教師は答えを知っている

④答えの正確さのみが教師の評価対象となる

このようなグラウンド・ルールが成立している学級では、「話し合いの機会を設けても、子どもが教師の指導を待ち続ける」「教師がグループを離れている間は話し合いが止まり、教師が戻ってくると教師に向けて再び話し始める」というようなことが起こります。つまり、日常的に教師主導のIRE連鎖で授業を展開している教室では、話し合いが成立しない可能性があるのです。

したがって、話し合う力を育てるためには、IRE連鎖の発問形式からの転換が求められます。つまり、学習者に自分の考えを説明させ、その考えを他の学習者となつなぎ、共に吟味、検討させるなかで新たな考えを生み出すような発話形式が必要になるのです。

ⁱ 渡辺雅子（2004）『納得の構造－日米初等教育に見る思考表現のスタイル－』東洋館出版社、p.22

ⁱⁱ 高垣マユミ編著（2010）『授業デザインの最前線Ⅱ』北大路書房、p.202